特別支援教育の扉 №４　　令和４年５月２６日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「保護者支援について」

１　違うのが当たり前

・ある調査では、「保護者と連携がうまく取れていますか？」という質問に、教育関係者は８５％がうまく取れていると答えたのに対し、保護者は６０％前後にとどまっていました。子どもは活動する場所・人・内容等によって、見せる姿が異なります。また、保護者と指導者では、同じ経験を積んでいないので、１００％理解し合うことが難しいと思います。

互いの立場を理解し、違いを認め合うことが支援のスタートです。

２　保護者を取り巻く社会の変化

・少子化（一人の子どもに集中することから期待が大きくなり、プレッシャーへ）
・核家族化（子育て家庭の核家族率８割→人と関わる経験不足　本物の体験が少ない）
・地域社会のつながりの希薄さ（身近に相談相手がいない）
・家庭環境の複雑さ（貧困家庭の増加等）　・養育環境の弱さ（虐待、ネグレクト等）
・夫婦の会話の少なさ　・育児に関する情報量の多さによる混乱と不安

子育てに不安を感じている保護者が７割に及んでいる調査結果から、子育てを「孤育て」と表現する人もいます。

３　保護者の障害受容の過程

（１）先天奇形がある子どもをもつ保護者の心情の変化
ショック（絶望）→否認（ドクターショッピング）→悲しみと怒り→適応（安定）→再起（希望）

（２）発達障害のある子どもをもつ保護者の心情
・子どもが「困っている」ことを理解できない
・「わがまま」「やる気がない」「努力不足」と思って、強く叱ってしまう
・周囲から「親の育て方が悪い」と言われて自信をなくす
・誰も味方がいない（孤立感・孤独感）→教師・隣近所・夫・親など、全てが敵に見える
・周囲に謝ることが重なり、子どもの気持ちを聞く「余裕」がなくなる
→「親の二次障害」
自信喪失　自己防衛（人の言うことをきかなくなる）　虐待につながる　躁やうつになる

（３）いろいろな説の統合（障害受容の螺旋系モデル）
・障害受容の過程は個々に異なり、螺旋階段を上るように、行ったり来たりして少しずつ適応へと進む

その時の保護者の心情に寄り添った支援を行うことを心掛けましょう。

４　保護者のいろいろなタイプ（父親と母親、両親と祖父母に認識のズレが生じる）

・我が子の状態に気付いていない
・気付いているが、楽観的に考えている（「自分も小さいときそうだった」と話す父親が多い）
・気付いているが、認めたくない
・原因はほかにあると考え、誰にも相談できず一人で悩む
・我が子には障害があると決め付けている、心配しすぎている
・障害を受け入れて、専門機関と連携している

様々なアンケート調査では、多くの母親は３歳以前に気付いていたことが分かっています。母親は最も早く気付き、最も早く悩み始めます。しかし、「障害かもしれない・・・」と認めることはできないのです。それが母親の姿です。

5　保護者の４つのハードル

第１のハードル　障害が発見されたとき：なぜ、うちの子だけ？　そんなはずはない！
第２のハードル　就学の時期：期待よりも不安が大きい！
第３のハードル　卒業の時期：期待よりも不安が大きい！
第４のハードル　親が高齢者になったとき：親亡き後のことが不安！

保護者と「なんとかしたい」という思いのカタチを重ね合わせて、ハードルをステップに変えられるようにしたいものです。

6　保護者に伝わりにくい４つの理由

（１）保護者に「正しく理解されていない」
専門用語を使っている、回りくどい言い方をしている、話がまとまっていない
（２）保護者が「理解したくない」
言われなくても分かっている、理解して対応してきたという疲労感がある
（３）子どもの状態像の「理解に差がある」
子どもは活動する場所・人・内容によって異なる
（４）保護者が発達障害そのものを「理解できていない」
見えない障害だから分かりづらい　親が発達障害であれば気付きにくい

「伝える」と「伝わる」は違います。１００％「伝わる」努力をして、誤解を少なくすることが求められます。

7　保護者への支援　Ｑ＆Ａ

（１）子どもの気になる状態に気付いていない保護者への対応
①伝える必然性があるかどうかを校内（園内）委員会で共通理解を図る
②誰が、何を、どのように伝え、伝えた後の支援内容も明確にする
誰→管理職、校内特別支援教育コーディネーター、学級担任等
③何をどのように：気になる様子を具体的に伝える（ノートや作品等を提示する）
④伝えた後の支援：期間を設けて支援・評価するために「個別の指導計画」を作成する
⑤関係機関につなぐ場合：何回か校内（園内）で評価した後に伝える

保護者が気付く以前に他人から障害を指摘されると、診断時と同じショックを受けるといわれています。はじめに時間をかけましょう。学校（園）は、保護者の味方でいる必要があるので、外部の関係者に入ってもらうことも選択肢の一つです。

（２）子どもを関係機関につなげる場合
保護者に動くように依頼するのではなく、学校（園）としてどう対応してよいのか、参考にしたいので、関係機関に相談したい、専門家のアドバイスを参考にしたいと、自分を主語にし、学校（園）も動くこと、一緒に考えること、困っているのは子どもであることを前提に話す
学校の困り感だけでは進めない、「念のために」という言葉を忘れない

薬物療法は対症療法・補助的手段であり、学校（園）では、子どもの困り感を軽減する環境調整と、子どもへの直接的なアプローチ（ソーシャルスキルトレーニングや認知行動療法等）が大切となります。

8　保護者と信頼関係を深めるポイント

・小さな共通点を見付ける　　・ほっとくつろげる言葉を掛ける
・子どものよいところを伝える　　・保護者の話を聴く、共感する、頑張りを認める
・困っているのは子どもであるというスタンスをもつ
・自信をもって子どもと関わる姿を見せる
・学校（園）の取組を伝えたり家庭での様子を尋ねたりする
・誠意と敬意ある態度を心掛ける（尋ねる姿勢）

保護者とまずいことも言える、聞ける関係をつくること、校内で担任以外とも話せる先生をつくること、うまくいかないときは外部とつながることが大切です。

「能代山本地域相談機関一覧」を作成しました。もしもの時にご活用ください。